新境地と再訪

Muldoon の最新詩集 *Joy in Service on Rue Tagore* を読む

高岸 冬詩

はじめに

シンポジウム第4部門「アイルランド島の現代詩——新しい天候を告げる詩人たち」の第4登壇者として、北アイルランド詩人 Paul Muldoon (1951-) を取り上げた。マルドゥーン (以下 M と略記) は第1詩集 *New Weather* の冒頭の詩“Wind and Tree”で、様々な風を受け止める樹木を描き、「新しい天候を告げる」若き自分に言及していた。一方、現在70歳を過ぎた M が告げる「新しい天候」は、昨年2024年春に刊行された最新詩集 *Joy in Service on Rue Tagore* (以下 *Joy* と略記) を読み解くことで見えてくると考え、*Joy* 所収の詩数篇について論じた。

タイトル詩

Joy のタイトル詩は、インドのノーベル賞詩人タゴールの“I slept and dreamt that life was joy. I awoke and saw that life was service. I acted and behold, service was joy.”という言葉から生まれた。Joy, Service, Tagore という言葉を組み合わせたタイトルは、言葉のコラージュとも取れるが、ある物語——ジョン・ル・カレの小説に登場しそうな元スパイの老人が、バリの医院で血液検査を受け、最後にその結果が陰性と知り嬉し気な足取りで医院を出るまでの間に、スパイ時代の任務を回想する物語——を紡ぎだしている。タゴールの原文の単語をばらして生み出した文から物語を発想し、14行のソネット3部構成の定型の中で言葉同士を韻で繋ぎ、独特のリズムを生み出しつつ構成した、M 特有の脱構築的手法が生かされた詩であるが、そうした手法は *Joy* の他の詩においても健在である。

繰り返し (repetition) の要素

Joy でとりわけ目につくのは、従来の彼の詩の顕著な特徴である繰り返しの要素である。最も目立つのはキーフレーズが繰り返されるパターン、例えば4行連句4連の詩“The River Is a Wave”では、第1連の1行目のフレーズ“The river is a wave that never breaks”が第2連では2行目、3連では3行目、最後の4連目では最終行に配置される、行ずらしの繰り返しパターンになっている。この形式の16行詩を M は“quatern”と説明し、*Joy* の中で5編の詩に採用している。また、近年 M はバンド活動を通してロックの歌詞を多数書いているが、歌詞 (lyrics) においてリフレインやキーワードを繰り返す技法が、*Joy* の詩 (poems) にも活かされていると見なすことができるだろう。

新境地としての“Near Iziun”

一方、*Joy* の M の「新しい天候の詩」は、ロシアによるウクライナ侵略戦争を扱った、1篇22行×9篇の中篇詩“Near Iziun”である。これまで M が戦争や北アイルランド紛争を扱った詩は、捕え処のない間接的な表現が多かったが、この詩は、ロシアの攻撃を受け苦境に立つウクライナ人の視点から、侵略戦争の仕掛人、ロシア大統領プーチンを徹底的に非難した、従来の M らしくない詩と言える。ウクライナ人を語り手とする劇的独白の手法を執りながら、作者 M のアイデアが語り手の仮面の外に見え隠れし、M 自身のもと思われるプーチン批判のメッセージがストレートに伝わってくる詩である。ウクライナへの侵略戦争を目の当たりにした M は、詩人としての無力さを痛感したのではないだろうか？ そんな彼が言わばペンを武器に変え、プーチンの武力攻撃に対して言葉のレトリックで応戦し、痛烈に反撃するという新境地を開いた詩が、“Near Iziun”ではないかと考えられる。

歴史の繰り返しとしての“Near Iziun”

“Near Iziun”の冒頭では、地下シェルターに退避する「我々」ウクライナ人が、ロシアからのロケット弾攻撃の脅威にさらされ、ドンバス平原に地獄の風景が一面に広がる悪夢を想像する。そして、

Since Putin has but one item on his agenda / there is but one on our agenda— / to see him strung up for his crimes / against Ukraine as the perpetrators of the pogrom / at Babi Yar were to be hung up by their heels. / We must believe the wheel / will come full circle now we try to regroup / near Iziun, even if reconstituting the wizened grapes / After which the city is named means we boil / more snow for water. (ll. 7-16)

この戦争の元凶プーチンがウクライナへの侵略を唯一の目標に掲げたので、ウクライナ人たちの唯一の目標は、プーチンが処刑されることだと主張する。ここで重要なのは、プーチンの戦争犯罪が、第二次大戦中にナチス・ドイツがウクライナのキーウ近くのバービー・ヤールの溪谷で行った、3万人を超えるユダヤ人大虐殺 (“the pogrom / at Babi Yar”) の再現であり、当時の戦争犯罪人たちが処刑されたように、プーチンも同じ運命を辿り処刑されると信じている点である。踵吊りの処刑の発想には、ムッソリーニが銃殺後、逆さ吊りの見世物にされた逸話が重なる。こうした歴史の繰り返しは“the wheel / will come full circle”という言い回しに反映され、プーチンへの抗戦や破壊された町の復興への願いは、接頭辞“re”のついた単語“regroup”“reconstituting”に託され、ウクライナ人の反撃への決意が詩の表現でも強調されている。“wheel”という語は *Joy* 全体に幾度も反復され、様々な歴史の繰り返いを暗示するキーワードにもなっており、M の繰り返しの手法は、こうした点にも反映されている。

Belfast Pogrom

“Near Iziium”の pogrom に関連して、“The Belfast Pogrom: Some Observations”という詩が *Joy* に収められている。Belfast Pogrom は、1920 年 7 月 21 日にベルファストの造船所で、カトリック労働者を排除しようとするプロテスタント労働者たちの暴力で始まり、約 2 年間に両陣営で数百名の犠牲者が出るに至った暴動である。M は “The shipyard workers are no lighter on their feet / than the linen workers who flock / to Ross’s Mill on Odessa Street . . .” (造船所の労働者たちの足取りは軽くない / オデッサ通りのロス工場に集まる / リネン労働者たちと同様に) という何気ないフレーズをリフレインのように繰り返し、3 行連句の連を 9 連、最後の 10 連目のみが 4 行連句となる詩形に、3 行連句の 1 行目と 3 行目に *feet/street* の脚韻、各連の 2 行目には *fl* で始まる単語、*flock, flax, fluke*, 等を必ず配し、定型と脚韻を重視する M 本来の手法に即して書いている。詩が進むにつれ、徐々に事件の暴力性も明らかにされ、例えば、焼き討ちされたカトリック教徒の家から降ってくる “The black snowflakes” (黒い雪片) への言及、鞭で打たれたカトリックの「少年の背中にはロス工場の上にはためく / ユニオン旗のような縞模様が刻まれた」 “The boy’s back striped like the flag / flying over Ross’s Mil” といった象徴的イメージを提示する。最後は “When it comes to beating a retreat / through a mass of blood and brain-flecks / the shipyard workers are no lighter on their feet / than the linen workers of Odessa Street.” のように、死者たちの血や脳片が飛び散る凄惨な光景の中を引き上げていく労働者たちの、決して「軽くない」足取りが示され、この抗争の悲惨な状況の余韻で締めくくられるが、M が北アイルランド特有のテーマを再訪したこの詩では、カトリック、プロテスタント両陣営の抗争が、第三者的な視点から比較的抑制された筆致で描かれており、副題の “some observations” という言葉がこの詩の性質をよく表していると言える。

“Near Iziium”のプーチンへの揶揄と批判

一方、新境地の詩 “Near Iziium” に戻ると、第 1 篇の最後でウクライナ人が、プーチンの前ソヴィエト的世界観を “his Weltanschauung” とドイツ語で述べるのは、ヒトラーと重ねようとする意識の表れと取れる。また「前ソヴィエト的 (pre-Soviet)」を繰り返すのは、彼をロシア革命前の専制君主ツァーリと重ねようとする所以であり、第 3 篇では彼がペレストロイカ時代のデータを消去し、帝政ロシアへのワープを狙っていると指摘する。

第 4 篇では、ウクライナの力を甘く見ていると、バラのとげに刺されるぞ、と警告を発する際の「とげのないバラはない」という表現が、アイルランド語で “Ni bhionn smeara gan dealg” と表記される。dealg (とげ) を ideologue と異種言語間で脚韻を踏ませる狙いも含め、アイルランド語に精通した M が顔を覗かせている箇所と言える。

詩の後半ではプーチンへの揶揄や批判の筆致がさらに強まる。ゴーゴリやナボコフが言及したことでも知られる文芸用語 poshlost (ロシア語ポージュロシチ пошлость の英訳) を “Our would-be Tsar. Poshlost. Total disarray.” のように使用し、「完全なる混乱」に陥る「自称専制君主」プーチンを「俗悪なる者」の意味で揶揄するが、こうした文芸用語を用いること自体が M の介入を示唆し、Putin と poshlost の p の頭韻による結びつきも効果的である。

第 7 篇では、プーチンの名前の意味を “Putin. His name means both / “path” and “psychopath.” と述べて彼を「サイコパス」呼ばわりする。また、彼がウクライナの原子力発電所をポーカーフェイスで攻撃すれば、モスクワにも核被害が及び彼も死ぬ、という含みで、彼の poker-face (この語も Putin と頭韻を踏む) が彼の death-mask になる、というブラックユーモアを 2 度繰り返して、彼自身が最終的に死を迎えることを強調する。

第 9 篇の最終場面では、まずプーチンが強制収容所に送られるヴィジョンを提示し、彼が単純に殴り倒されて終わるのではなく、敵に与えた苦しみを自らが味わうまでは死なせない、という究極の恨みを突き付ける。さらに、天国での安らかな眠りを与えないため、彼の枕にハリエニシダを詰め込む提案がなされるが (“Let his pillow be stuffed with gorse”) ハリエニシダのアイデアにはアイルランド人 M ならではの発想が読み取れる。そして、最後の行 “Across the Dnieper. At half cock. A black gig.” (ドニエプル川で。早発して。黒ボートで。) では、銃が早発する (“go off at half cock”) という熟語により、ドニエプル川の攻撃でプーチンの銃が早発し、失敗に終わることを願ってこの詩が締めくくられるが、ここは銃が暴発して彼が死ぬことを含みにし、三途の川を喪章を表す黒色のボートに乗って彼が渡っていくイメージが重ねられている、と解釈することができるだろう。

おわりに

アメリカに渡って 40 年近くになる M であるが、北アイルランドは現在でも彼の詩作のアイデアの源として再訪する故郷であることは *Joy* にも当てはまる。だが、プーチンによるウクライナ侵攻を目の当たりにした M が、一人の北アイルランド詩人として、ウクライナ人に寄り添っての詩作を決意して生まれたのが、新境地の詩 “Near Iziium” であろう。従来の M の詩とは趣向が異なるものの、プーチン批判のレトリックを繰り返して伝えられるメッセージには正直溜飲の下がる思いで、全面的に賛同して読むことのできる稀有な詩ではないだろうか。

引用文献

Paul Muldoon. *Joy in Service on Rue Tagore*. Faber & Faber, 2024.

Summer Bulletin 2024. Poetry Book Society, 2024.